

古代ギリシアのパネースのコイン

—王名属格の源流—

吉池孝一

1. 緒言

紀元前4世紀、アレクサンドロスの東方遠征に於いて発行された銀貨に「王名属格」の銘文(ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ alexandroy)がある。このような王名属格を、中村元・早島鏡正(1963;p.336)は、「～王の(貨幣)」と読む。Zander H.Klawans(2003;p.22)は、「～王の」と直訳しその意味を「この貨幣は誰々によって打刻(発行)された」とする¹。いずれも読みの根拠を明らかにしない。中村雅之(2019)は、「人名属格+第一人称単数動詞 emi/eimi(私は～である)」が器物に記された場合、器物が語る形式で「私は誰々のもの」と読むことが前7世紀から前6世紀の古代ギリシアに行われたことを紹介する。以下二つ画像を提示し吉池の理解するところを記す。

一つ目はブライアン・クック著/細井敦子訳(1996;pp.79-80)²に掲載されたアッティカ方言で書かれた碑文である。模写であるからやや不安であるが参考にはなる。関係する第1行から3行を抜き出しローマ字を付すと次のとおり。



¹ デメトリオス王の貨幣銘文の記述の一部であるが次のようにある。
“This ending, incidentally, that is, the ending OU is the genitive (possessive) singular ending in Greek. The word for king appearing upon this coin and ending in ὸς also is in the genitive case. Thus, the coin would read, “Of Demetrios the King,” meaning that the coin was struck by him ...”

² ブライアン・クック著/細井敦子訳(1996)『ギリシア語の銘文』大英博物館双/書失われた文字を読む(5)、學藝書林。

第1行は左から右に、第2行は右から左に、第3行は左から右に読み進む。いわゆる牛耕式である。いまローマ字と当該書が記す意味を対応させると次のとおり。phanodiko : eimi : to hermokratos : to prokonesio : (私はプロコンネーソスの人ヘルモクラテスの子ファノディコスの(石碑))。

「:」は単語の切れ目で、二つの「to」は冠詞であろう。to hermokratos (ヘルモクラテスの子の) と to prokonesio (プロコンネーソスの人の) は修飾成分で、文の根幹は phanodiko eimi である。これは石碑自身が「私はファノディコスの(石碑)」と語っている。

二つ目はやはりブライアン・クック著/細井敦子訳(1996;p.109)に掲載されたドーリス方言で emi と書かれた香油壺である。



香油壺の胴の部分には複数の人名が左から右に書かれている。頸の部分には女性の横顔と右下に文字がある。壺の画像を45度左に倒し頸の文字をみると、左から右に aineta、右から左に鏡文字で「 $\text{ε}i\text{Mm}\text{ε}$ 」 emi とある。字形について一言する。emi の ε は左向きに突き出た二つの膨らみ(丸)の間がやや離れており、emi の Mm は終筆部分の形が標準の字形と異なるように見える。字形は古いコリントス式アルファベットを使用したドーリス方言とのこと。emi が方言における第一人称単数動詞「私は～である」として、aineta がドーリス方言の主格形か属格形か意見が分かれており、主格形とすると「私はアイネータだ」となり、属格形とすると「私はアイネータのもの」となるという。女性の口の横に女性の言葉であるかのように aineta emi とあることからみて主格形の「私はアイネータだ」と仮に読んでおきたい。いずれにしても「人名の格表示+第

一人称単数動詞 emi」で器物自身が語っている例にはなる。

中村氏はこのような古代ギリシアの例を下って前 4 世紀のギリシア貨幣の「王名属格」の銘文と結び付けた。動詞はないが、これを、器物を主語とする古代ギリシアの用法の名残と見て、「わたしは誰々のもの」と読み、「私というこの貨幣はアレクサンドロスの命によって打刻されたものである」とした。興味深い説であるが、古代ギリシア語の碑銘などにある「人名属格 + emi/eimi (私は～である)」と前 4 世紀の貨幣銘文の「王名属格」をつなぐ資料の存在を確認する必要がある。両者をつなぐ資料として前 7 世紀後半とされる所謂 “Phanes Coins” (パネースのコイン) がある³。

前 4 世紀、アレクサンドロスの東征により王名属格というギリシア貨幣の様式が、西のマケドニアから、東の中央アジアおよびインド西北一帯に広まるとともに属格の在り方も変容していったことを今後述べる予定であるが、本稿ではその前説として王名属格の貨幣銘文の意味と成立の経緯を確認する。

2. アレクサンドロスの銀貨

ここに紹介する古代文字資料館所蔵の貨幣はアレクサンドロスの銀貨であり、発行地がバビロニアであることを示すミントマークがウラ面の椅子の下にある⁴。



オモテ



ウラ

オモテ面はライオンの頭皮を被ったヘラクレスの像とされる。ウラ面は、椅

³ Phanes Coins の存在も中村氏のご教示による。

⁴ 鑄造場所を示すマークをミントマークと称する。このミントマークについては Price (1991;pp.460-468) v.1 の記述による。本貨幣は Price (1991) v.2 に掲載されている No.3661b に近い。

子に座り広げた右手に鷲、左手に笏を支え持ったゼウスの座像とされる。椅子の後ろにギリシア文字による発行者名がみえる。重さは 17.0g、径は 25.47mm。厚さは 5.50mm。

銘文

貨幣のウラを左に 90° 回転させ椅子の背もたれの後ろにある銘文をローマ字に翻字すると次のようになる。左から右に読む。最初の文字は欠けているが



[A]ΛΕΞΑΝΔΡΟΥ (alexandroy アレクサンドロスの) とある。マケドニア王家の貨幣銘文は次のとおり。銘文及び王

の在位年は Sear (1978,2002)1 巻による。

1. アレクサンドロス一世 (495-454 B.C.) ΑΛΕΞΑΝΔΡΟ (alexandro)
2. ペルディッカス二世 (451-413 B.C.) ΠΕΡΔΙΚ (perdik)
3. アルケラオス (413-399 B.C.) ΑΡΧΕΛΑΟ (arkhelao)
4. アミュンタス三世 (389-383,381-369 B.C.) ΑΜΥΝΤΑ (amynta)
5. ペルディッカス三世 (365-359 B.C.) ΠΕΡΔΙΚΚΑ (perdikka)
6. フリッポス二世 (359-336 B.C.) ΦΙΛΙΠΠΟΥ (philippoy)
7. アレクサンドロス三世 (大王) (336-323 B.C.) ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ (alexandroy)

父親のフィリッポス二世の貨幣銘文にも属格形で ΦΙΛΙΠΠΟΥ (philippoy フィリッポスの) とある。フリッポス二世の時に中央部の標準的なギリシア語の属格形が銘文に採用され、それがアレクサンドロス三世 (大王) に引き継がれたことを示す。このような王名属格の貨幣銘文の意味と成立の経緯が問題となる。意味と経緯の考察において前 7 世紀後半とされる “Phanes Coins” (パネースのコイン) が参考となる。

3. Phanes Coins

画像

Wolfgang Fischer-Bossert(2020)に Phanes Coins の画像が多数収められている。

そのうち銘文の有る6種の画像と、銘文の無い1種の画像を引用する。



① (1h) オモテ



① (1h) ウラ



② (4a) オモテ



② (4a) ウラ



③ (3a) オモテ



③ (3a) ウラ



④ (2b) オモテ



④ (2b) ウラ



⑤ (6e) オモテ



⑤ (6e) ウラ



⑥ (5a) オモテ



⑥ (5a) ウラ



⑦ (15c) オモテ



⑦ (15c) ウラ

何れも金と銀の合金である⁵。

①1h (1hは貨幣を類別する記号。以下同様)は14.03gm。オモテの鹿の図像の上に古代ギリシア文字の銘文がある。銘文は②と同様に3語であるが第1語の3字目が②にはない。ウラに四角のパンチが3つある。

②4aは14.30gm。オモテに銘文がある。銘文は3語。ウラに四角のパンチが3つある。

⁵ Wolfgang Fischer-Bossert(2020;p.428) ‘The gold content fluctuates between 40 and 47%, accordingly the silver content between 51 and 56.5%, and the copper content between 2 and 3.25%.’

③3a は 14.13gm。オモテの銘文は①②と同様に 3 語であるが綴りが異なる。ウラに四角のパンチが 3 つある。

④2b は 14.17gm。オモテに銘文が 2 語。ウラに四角のパンチが 3 つある。

⑤6e は 4.72gm。オモテに右から左に綴られた銘文が 1 語ある。ΦΑΝΕΟΣ。ウラに四角のパンチが 2 つある。

⑥5a は 4.72gm。オモテに左から右に綴られた銘文が 1 語ある。ΦΑΝΟ[Σ]。ウラに四角のパンチが 2 つある。

⑦15c は 2.33gm。オモテに鹿の図像がある。銘文はない。ウラに四角のパンチが 1 つある。パンチが 1 つの貨幣は多数あり重量は概略 2.39gm～0.5gm に収まる。

Andrew Meadows (2021;p.208)によると、この種の貨幣は小アジア西南部イオニアのエーゲ海沿岸に位置する Ephesus で発行された前 625-600 年のものという。貨幣の重量とウラのパンチの数の相関より見て、パンチの数と貨幣の額面価格と関係があると見て大過はないであろう。問題は銘文である。

銘文

①から⑤は古代ギリシア文字で右から左に綴られている。単語の間に空きは無い。⑥は左から右に綴られている。書写の方向が右→左であるか、あるいは左→右であるかにより、文字の一字一字の向きは反対になる。いわゆる鏡文字となる。これは古ギリシア文字の特徴⁶。Wolfgang Fischer-Bossert(2020)はこれらの銘文を古代ギリシア文字ではなく古典期ギリシア文字に翻字して提示する。本稿も便宜としてそれに従う。

① ΦΑ(E/N)ΝΟΣ ΕΜΙ ΣΗΜΑ(pha(? e/n)nos emi sēma)

⁶ ジョン・ヒーリー著矢島文夫監修(2000)『初期アルファベット』(大英博物館双書失われた文字を読む4) 東京：學藝書林、59-67 頁参照。

Jon F. Healey (1990) *The Early Alphabet*. London: British Museum Press の邦訳。邦訳の初版は 1996 年。



② ΦΑΝΟΣ ΕΜΙ ΣΗΜΑ(phanos emi sēma)



③ ΦΑΝΕΟΣ ΕΙ[Μ]Ι ΣΗΜ[?](phaneos eimi sēma) 画像は省略する

④ ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ [ΣΗΜΑ] (phaneos eimi [sēma])



⑤ ΦΑΝΕΟΣ(phaneos)



⑥ ΦΑΝΟ[Σ] (phano[s]) 左→右 画像は省略する

①の意味を Wolfgang 氏は ‘I am the badge of Phanes’ 「私はパネースの記章」とする。ΦΑΝΟΣ (phanos)と ΦΑΝΕΟΣ (phaneos)を「パネースの」、EMI (emi)と EIMI (eimi)を「私は～である」、ΣΗΜΑ(sēma)を「記章」とすることができる。④以降は①に準じて理解する。

①の ΦΑ(E/N)ΝΟΣ の(E/N)の出現の理由はわからないがその綴りを整理したものが②以降と見ておくとして、綴りの問題は4点ある。1点目は動詞の EMI (emi)と EIMI (eimi)である。2点目は人名属格⁷の ΦΑΝΟΣ (phanos)と ΦΑΝΕΟΣ (phaneos)である。3点目は、④を ΣΗΜΑ(sēma)の省略とするか、それとも欠落とするかという問題である。4点目は⑤と⑥を動詞の EMI (emi)もしくは EIMI (eimi)の省略とみることができるかという問題である。

1点目の EMI (emi)と EIMI (eimi)については次のとおり。

E M I (emi)と E I M I (eimi)

ブライアン・クック著/細井敦子訳(1996;p.79)は、前550-540年頃の碑文で、上段と下段に二通りの方言を並べたものを紹介する。上段にはイオニア方言で emi とあり、下段にはアッティカ方言で eimi とある。

emi と eimi が方言の違いとすると、先に問題とした2点目の ΦΑΝΟΣ (phanos)と ΦΑΝΕΟΣ (phaneos)の違いも方言の違いに準じたものとして良いのであろう。ただし、これらの貨幣の発行地について、小アジア西南部イオニアのエーゲ海沿岸に位置する Ephesus とする説と、発行地を特定せずイオニア中央部または北部とする説⁸がある。いずれにしても、方言の差異と見るよりも、口語的であ

⁷ 属格であることについて Wolfgang Fischer-Bossert(2020;p.435)はさまざまな説を挙げた後に ‘Everyone was ready to accept ΦΑΝΕΟΣ as the genitive form of the (male) name Φάνης, although it was believed initially that the alternative version ΦΑΝΟΣ created a problem: according to sound laws established by modern philologists, the Archaic Ionic dialect, unlike the Greek koinē, does not easily turn the genitive ending –εος into –ους. ………. Be that as it may, the view that ΦΑΝΕΟΣ/ΦΑΝΟΣ must be interpreted as the genitive of a man’s name prevailed.’ とする。ΦΑΝΕΟΣ/ΦΑΝΟΣ を属格形とみて良いのであろう。

⁸ Wolfgang Fischer-Bossert(2020;p.442) ‘All that can be said for sure is that the Phanes coinage is one of the larger issues of early electrum coinage, and likely to be

るか文語的であるかに類する社会言語の差異であり、イオニア方言やドーリス方言に出てくる emi が口語的、アッティカ方言に出てくる eimi が文語的ということであろう。後者のアッティカ方言形は後に古典語として普及する。発行年もある程度の時間の幅があると見た方がよい。3 点目の問題は次のとおりである。

④は Σ Η Μ Α (sēma) の省略か欠落か

④の銘文は、もともと ΣΗΜΑ(sēma)が省略されており ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ(phaneos eimi) としか書かれていないとする理解と、本来は ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ ΣΗΜΑ(phaneos eimi sēma)とあったが ΣΗΜΑ(sēma)の部分が貨幣の外にはみ出て欠落しているとする理解がある。Andrew Meadows (2021;p.191)は ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ とし意味を ‘I am (the mark) of Phanes’ 「私はパネースのもの (印)。」とする。ΣΗΜΑ(sēma)は省略されていると見ているようだ。Wolfgang Fischer-Bossert (2020;p.444)は ‘Above, ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ [ΣΗΜΑ] (retrograde, letter forms similar to obv. 1【①の銘文を指す】. If it were included, the word ΣΗΜΑ must have been placed below the groundline).’ とする。ΣΗΜΑ(sēma)は地平線の下にあるはずで欠落していると見ているようだ。

わたしは、省略されているとする理解が穏当と考える。①②③の銘文は 3 語であり、地平線までに収まるような文字の大きさとなっている。それに対して、2 語の④(2b)の文字は①②③よりも大きく、2 語としては地平線までに収まる。Wolfgang Fischer-Bossert (2020;p.444)によると 2 語の④に類する貨幣は 5 枚あり、その内 2b,2c,2e の 3 枚の画像を確認することができる。いずれも文字は大きく、2 語は地平線までに収まる。銘文は 2 語であるためそれに合わせて文字を大きくし、地平線までに収めたのであって、文字を大きくしたため第 3 語目が地平線までに収まり切れなかったということではないであろう。先に挙げたように碑文や器物の古代ギリシア語に「人名属格＋第一人称単数動詞」の形式があるからには、同じ形式が貨幣銘文に有っても不思議はない。

from central or northern Ionia.’

パネースの貨幣についてみれば、ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ ΣΗΜΑ(phaneos eimi sēma)という銘文とともにあることを考慮すると、ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ(Phaneos eimi)はΣΗΜΑ(sēma)の省略と見るべきである。

次に議論する4点目は本稿の核心に相当する。⑤と⑥を動詞のΕΙΜΙ(emi)もしくはΕΙΜΙ(eimi)（以下便宜としてΕΙΜΙ(eimi)で代表させる）の省略とみることができるかという問題である。

人名属格のみの銘文は ΕΙΜΙ (eimi) の省略か

⑤⑥などの人名属格のみの銘文は通常‘of Phanes’と直訳される。やや詳しい解説として Colin M. Kraay (1976;p.6)がある。それによると Phanes Coins の銘文を挙げ 3 語の銘文を‘I am the badge of Phanes’とし、1 語の ΦΑΝΕΟΣ (genitive) については、近東にある貴金属に記された所有者の名前に由来するという⁹。

1 語の ΦΑΝΕΟΣ を、第一人称単数動詞 ΕΙΜΙ(eimi)の省略とする説の有無については寡聞にして知らない。しかし、Phanes Coins の銘文には、3 語の ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ ΣΗΜΑ(phaneos eimi sēma)と、2 語の ΦΑΝΕΟΣ ΕΙΜΙ(phaneos eimi)と、1 語の ΦΑΝΕΟΣ(phaneos)が銘文の変異として“共に在る”。この変異の共存をもって次のように理解することができる。貨幣の作り手は 1 語の ΦΑΝΕΟΣ(phaneos)を動詞 ΕΙΜΙ(eimi) の省略であると意図していた。そして貨幣の受け手もその意図を了解していた。

同一の権力者あるいは近い時期や地域において作られた碑文や器物の銘文の表現形式に変異を認めて議論に資することは容易ではない。それに対して、貨幣は同一の権力者のもと大量に発行され後代に複数枚残る。そのため、銘文の

⁹ 「a smaller denomination of the same issue is inscribed simply ΦΑΝΕΟΣ(genitive), which provides a prototype for all subsequent ethnics in the genitive, which can thus be interpreted in the form ‘this is the device of (the Syracusans)’ .¹」。ここにある ‘this is the device of (the Syracusans)’ の理解は困難であるが、これに付された注 1 には ‘The inscription of Phanes can itself be traced back to a Near Eastern practice of marking cast ingots of precious metal with the owner’s or maker’s name: see M. Balmuth, *Studies presented to G.Hanfmann*(Mainz1971), 1ff.’ とある。

一部が欠落している場合、同種の貨幣を互いに参照し欠落した銘文を復元することができる。また大量に発行される貨幣の銘文は、発行者により入念に検討されたはずであるから、表現形式に変異がある場合それは偶然の所産ではなく何らかの意図があるとみることができる。表現形式の変異を互いに比較することにより銘文の作り手の意図を見いだすことができる場合がある。これは通常の碑文や器物の銘には無い貨幣銘文の利点の一つである¹⁰。その意味で銘文に幾つかの表現形式の変異がある Phanes Coins は貴重である。

4. 結語：Phanes Coins の銘文はアレクサンドロス銀貨銘文のプロトタイプ

Phanes Coins の銘文に 3 語「Phanes の属格＋第一人称単数動詞 eimi＋badge（記章）」と、2 語「Phanes の属格＋第一人称単数動詞 eimi」と、1 語「Phanes の属格」が“共存している”ことより、1 語の「Phanes の属格」を第一人称単数動詞の省略形とみることができる。そうであるならば Phanes の属格 ΦΑΝΕΟΣ／ΦΑΝΟΣを貨幣自身が語る形式として「私はパネースのもの（記章、印）」と読むことができる。

以上により、前 7 世紀後半の貨幣銘文の「人名属格（Phanes の属格）」を、前 4 世紀のアレクサンドロス発行銀貨の「王名属格」のプロトタイプとみるならば、ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ alexandroy を貨幣自身が語る形式として「私はアレクサンドロスのもの」と読む中村氏の説を補強する資料を一つ追加することになる。

なお、前節で紹介した Colin M. Kraay (1976)も注 9 で引用したところによると 1 語の「人名属格（Phanes の属格）」を後代の属格形のプロトタイプとみているようであるが動詞 eimi の省略とはしないので属格形の意味が異なる。

【参考文献（発行年順）】

中村元、早島鏡正訳(1963)『ミリンダ王の問い（1）インドとギリシアの対決』全 3 巻（東洋文庫 7）東京：平凡社。

¹⁰ 貨幣銘文の表現形式の変異を利用した議論に吉池孝一(2012)「西夏錢銘文の変遷と西夏の国情」がある。参考までに。

Colin M. Kraay (1976) *Archaic and Classical Greek Coins*. University of California Press. Berkeley.

ブライアン・クック 著/細井敦子 訳(1996)『ギリシア語の銘文』大英博物館 双書失われた文字を読む (5)、学芸書林。

ジョン・ヒーリー 著/矢島文夫 監修(2000)『初期アルファベット』(大英博物館 双書失われた文字を読む 4) 東京：学芸書林

Sear, D. R. (1978,2002) *Greek Coins and Their Values (Volume 1: Europe)*. Seaby, London. Reprinted 2002.

Price, M. J. (1991) *The coinage in the name of Alexander the Great and Philip Arrhidaeus : a British Museum catalogue v.1, v.2*. London: British Museum.

Zander, H. Klawans (2003) *Handbook of Ancient Greek and Roman Coins*, Whitman Publishing, Atlanta.

吉池孝一(2012)「西夏錢銘文の変遷と西夏の国情」『KOTONOHA』第 121 号(2012 年 12 月)、14-21 頁。

中村雅之(2019)「ヘレニズム貨幣における王名の属格に関する覚書」『KOTONOHA』201, pp. 1-2.

Wolfgang Fischer-Bossert (2020) “Phanes: A Die Study”【パネース：金型の研究】, *The American Numismatic Society* pp. 423–476. Wolfgang の論文は下記サイトで見る事ができる。

https://warwick.ac.uk/fac/arts/classics/intranets/staff/rowan/bsanumismatics/phanes_a_die_study_in_p_van_alfen_u_wart.pdf

Andrew Meadows (2021) “Local Scripts on Archaic Coins: Distribution and Function” . In Parker, Robert; Steele, Philippa M. (eds.). *The Early Greek Alphabet: Origin, Diffusion, Uses*. Oxford University Press. p. 191.